

解答

- 一 問一 A 眼鏡 B 身辺 C 具合 D 自費 E 身軽 F 研修 G 視野
 H 長(じて) I 宿命
- 問二 ウ
- 問三 人に見られたくない、雑然とした仕事場。
- 問四 施してはないので、自分がほしいものだけを村人は手に入れることになるから。
- 問五 オ
- 問六 (例) キャリアアップのために語学や資格を身につけること。
- 問七 世の中にはさまざまながいて、自分も、その中で人やものとながりがりながら生かされていると思うから。
- 問八 オ
- 二 問一 氷枕をつくりたい衝動にかられている様子。
- 問二 ゴム製とシリコン製の氷枕
- 問三 かつては空想や外国の遠い世界を、いまは現実のごく近い場所のことを思う。
- 問四 足が小さすぎて、サンダルがゆるゆるである様子。
- 問五 生活の気配
- 問六 自分がこの世を去る日も近づいているということ。
- 問七 氷枕
- 三 問一 言葉
- 問二 身の周りのものを見ては、幼な児がまだ回らない舌で次々に言葉を発すること。
- 問三 夕陽
- 問四 言葉の覚え始めなので、きちんと発音できていない様子。
- 問五 言葉を通して世界をとらえていくことものの姿に目をみはり、その成長をよるこぶ気持ち。
- 問六 若い母親が伝えていくものの始まり

解説

- 出典は、平松洋子「氷枕」
- 一 出典は、森まゆみ『おたがいさま』
- 原因不明の目の病気でもの見え方が尋常ではなくなり、家の中が「ものすごく散らかっている」ため、「ますます探しものでイライラするようにな」った筆者は、人生の、「たちどまりふりかえる中仕切りの時が来ているらしい」と判断し、身辺整理をしながら、人の「縁(えにし)」に思いをいたし、「片付かなさ」の中を生きているのが人間の宿命ではなからうか」と考えています。
- 問一 H「チョウ(長)じて」は「成長して・おとなになって」の意で、使いたれないと難しい言葉かもしれませんが。
- 問二 「社会学者の上野千鶴子さんから『勇氣ある公開ですね』と葉書をいただいた」で以来、「公開を勘弁してもらっている」のだから、筆者は、その言葉を軽い皮肉か揶揄と受けとったのです。
- 問三 「鶴の恩返し」の機織り場」とは、「つう」が鶴の姿にもどって機を織っている場所で、だれにも見られたくない現場です。筆者も「言葉を紡いでいる現場(＝「机の上に本が積み上がり、文房具、書類、ファイルが散乱して」いるような仕事場)を見られたくない」のです。
- 問四 「ただ」にすれば「施し」になるので、当方の善意を断れない村人は、自分には必要のないものまで押しつけられることだってあるかもしれません。筆者はそういうことを避けたいのです。
- 問五 「自分の役に立たない」と分かっているにも、「原稿を書き、本にするまでの苦勞を知っているから」こそ、そういうもの「のほう」が捨てられない(＝片付かない)。それが悩み。なのです。↓問七
- 問六 「環境だ、国際支援だといった」。「有意義」なことをしているというのを見せかけ(思いこみ)であって、「所詮自分の自己実現(＝自分の利益のため)の手段でしかない」ということでしょう。「有意義」なことをするための空間や時間は、片付けること(縁を切ること)によって得られたものです。自分の利益のためにしている「有意義」なことがらとは具体的には何か、と考えればよいでしょう。

問七 人は社会の中で生きていて、さまざまな人との“縁”あって社会は成り立っている、そして「その中に自分は生かされてどうにかやっている」ということに思いが至って、筆者は「捨てる手を止める」のです。

問八 中勘助の『銀の匙』は、灘中学とは縁浅からぬ作品のようです。

二 出典は、平松洋子「氷枕」

問一 「虫」は体内にあって、人の心的状態に影響を与えると考えられるもので、“腹の虫がおさまらぬ”“虫の知らせ”“虫が好かぬ”などという使い方をします。そのような気分になるのがうまく説明できない、理由もなくそのような気分になるということでは“理由もなく氷枕がほしくなる”、しかも「こぞって」「大合唱」とあるので、その欲求の程度が激しいということです。

問二 同じ段落の直前に二種類の氷枕についての描写があります、ゴム製とシリコン製と。

問三 「目を閉じて」「氷の転がる音に集中していると」、「いまは」「近い場所、それもごく近所のことばかりしきりに思う」のに対して、以前は物語の世界に出てくるような、あるいはテレビで観た外国のような「遠い遠いところ」を思ったとあります。

問四 足のサイズにくらべてサンダルがずいぶん大きかったということですが。

問五 「つねにひっそり閑としている」「おもちゃみたいに小さな木造の二階屋」の「台所の磨りガラス窓」にその影が見える「醤油。みりん。酒。はちみつ。少し離れた位置に台所用洗剤が一本。」「表札も出ていなければ、外に洗濯物も出ておらず、生活の気配はいつさい伝わってこない」が、「調味料はそれなりに減」っていたり「週末に醤油の量がぐっと少なくなっている」たりするのを確認して、そこに生活の気配を感じとっていたということです。

問六 筆者の年齢は分かりませんが、「腰の曲がった白髪のおばあさん」ほどではなくても、けっして若くはないよう自分姿を消してゆくときが次第に近づいてきているということでしょう。

問七 からころと鳴る音が、「あたしや知りませんよ責任ないし」と言っているようだ、というのだから、「あたし」とは“氷枕”以外の何者でもないでしょう。

三 出典は、たかとう匡子「幼な児は詩人」

たどたどしく発音しながら、次から次に言葉を発する幼な児を、喜びとともに驚異の目で見守る母親の気持ち詠んだ詩です。

「日暮れ時」、「野原のまん中」で、夕陽を浴びて幼な児が、葉っぱを拾いあげては「アッパ」、猫を指しては「ニャーニャ」、バナナに触れては「バ」と回らぬ舌で、うれしそうに母親に言っている情景が目につかぶようです。

問一 幼な児がごんごん言葉を覚えていくということでしょう。

問二 回らない舌で幼な児が発する言葉を「だっこだっこの詩」と表現してあります。「書き散らす」とは、身の回りのものを見ては片っ端から“ぐらいの意味でしょう」。

問三 「指を夕陽まみれにして」から、 に入る言葉は「夕陽」だと考えられます。

問四・五 たどたどしい発音でも回らぬ舌でも、母親はいちいち言い直しはさせません。何でもそのまま幼な児を受け入れます。言葉を通して世界を認識していく幼な児の目をみはる成長がうれしくて仕方がないのです。

問六 「ちいさな箱」に入れる言葉をはじめ子どもに教えるのは母親です。